

■ 書 評 ■

『クワガタムシが語る生物多様性』

五箇公一著, 集英社, 2010 年 9 月, 205 頁, 本体価格 1300 円

本書が題名一瞥で図書館の昆虫図鑑と一緒に押し込められないことを期待したい。もし、本書の目次を目にすればしめたものだが;「生物多様性とは何か」(1章),「生物多様性が危ない」(2章),「クワガタムシ (3章)・マルハナバチ (4章)・ミジンコ (5章)・ダニ (6章)・カエル (7章) が語る生物多様性」。つまり、本書は生物多様性が主題で、節足動物とカエル (および/あるいは、その寄生性真菌ツボカビ類) をモデルに語っている。だが確かにクワガタムシについては力が入り、第3章のほか、この昆虫に寄生するクワガタナカセというダニについて第6章で触れていたが、それら知見はいずれも最新かつおおむね悲劇的で、しかも著者自身が行った多様な研究の結果 (一次資料) である。また、著者オリジナルのCG挿絵は一見の価値あり。

まず、著者は民間会社で化学物質のリスク評価業務をしていた経験があり、彼により明らかにされた某シャンプーや農薬の恐ろしい実態は戦慄させる (5章)。この章ではミジンコのほか、毒性試験で必ず用いなければならない藻 (植物プランクトン) と魚 (ゼブラフィッシュ) を用いた実験例にも言及されていた。評者が日々接する獣医学徒は毒性学も習得するが (獣医師国家試験出題分野で、一流薬品企業の毒性病理業務は憧れの職域)、彼らにこの章だけでも読ませたい。獣医学体系の中での毒性学は化学物質と個体レベルの生理現象で完結させる。しかし、生態学を基盤にした毒性学教育こそ根本的な解決に近いと感じてはいた。そして、本書はその思いを一層強くさせてくれた。

さて、ほかの章であるが、それらはすべて外来種問題に収斂されていた。しかし、この問題を扱ったこれまでの書籍とは異なり、農業振興や新規の

愛玩あるいは実験動物などの目的で日本に持ち込まれた動物群とそれに寄生する病原体が自然生態系のリスク因子となっているという主張である。見落とされがちであるが、プリオンやウイルスなど一部例外を除けば、多くの病原体もやはり生物なので、やはり外来種の範疇に入ると啓蒙している。評者も、爬虫類・鳥類・哺乳類などの動物とその蠕虫類との進化的な固有の歴史の中で醸成された宿主-寄生体関係が、外来種の介在で攪乱されつつあるという点を疫学という手法で追いかけているので、非常に参考になった。この手の研究は、基盤となる在来の寄生生物相を押さえるのが重要な鍵なのだが、時間も手間もかかる。その間、外来種がどんどん入り込み、何が在来なのか、それとも外来なのか決めがたい状況になった。そういった時間がかかる研究も、外来種問題がクローズアップされ一気に進行することもある。その実例が両生類のツボカビ類である (7章)。両生類保全という視点で急速に調査研究を展開していたら、なんと、外来病原体と信じられていたこの真菌が、実は日本列島で分岐した可能性があるという。このどんでん返しは驚嘆させられた。しかし、2011年2月、日本獣医学会の学術誌 *The Journal of Veterinary Medical Science* が届き、さらに驚かされることなる。その号掲載のツボカビ症論文で同症罹患カエルの写真があったが、その同じ写真が表紙をも飾っていたのである。保守的な日本の獣医学も生態学からの突上げで変革中にあることを実感した。本書は徹頭徹尾、柔らかな語り口ではある。が、アカデミックなパワーはただものではないということも、正しく読み取って欲しい。

(浅川満彦/酪農学園大学)